

河上徹大印全集 第八卷

河上徹冬郎全集

第八卷

勁草書房刊

河上徹太郎全集 第八卷

昭和四十七年一月三十一日第一刷発行

定価二八〇〇円

著者 河上徹太郎

発行者 井村寿二

印刷者 白井倉之助

印刷所 精興社

製本所 牧製本

発行所 勁草書房

東京都千代田区神田駿河台二ノ三

電話東京(二九四)六一二一

振替東京一七五二五三

© T. Kawakami Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取替えいたしません)

河上徹太郎全集第八卷

編纂委員

石川 淳
井伏 鱒二
小林 秀雄

目次

文藝時評Ⅰ

昭和三十五年	9
昭和三十六年	38
昭和三十七年	80
昭和三十八年	121
昭和三十九年	163

文藝時評Ⅱ

文藝時評 口上―評壇愚痴	205
昭和十四年度文壇の回顧	211
文藝時評Ⅰ	215
文藝時評Ⅱ	218
*	
文壇隆盛の辯	222
事実と小説について	229

文學に憑かれた人々	234
文藝時評（昭和十一年）	241
ヒューマニズムの提唱について	263
評論の國策化について	268
現代小説の憂鬱	272
現代日本の短篇小説	276
文化行政といふこと	278
小説の中の「私」	285
思考の貧困	290
開戦と文學	297
新しき歴史の心	301
創作の低下について	306
前線へ出た「私」	309
歴史的方法の勝利	316
古典の發想	320
作品リスト・年譜	325
大平和登	

解題	……	400
解説	……	393

文
藝
時
評
I

昭和三十五年

四月

これから當分の間毎月この欄を受け持つことになつて、今月はそのお目見えだが、初端から生憎手ごたへのある作品が一つもない。こんな時連載で完結したものがあると助かるのだが、それもなし。それにある程度名前の賣れた作家は雑誌の短篇に手を抜くやうになつたのが實情であつてみれば、取り上げるのはどうしても新人やそれに近い若い作家といふことになる。こんなことでは新聞の月評欄はかつての綜合雑誌における運命のやうに廢止になるのではないかと思はれるのだが、事實上まだその效用が認められてゐるのは他ではない。小説ブームに乗つて小説の数は近頃益々ふえ「一流誌」に載つたこれらの作品も必ずしもそれで檜舞臺に出たわけではなく、いはば豫備軍であつてスカウトの對象であることと、一方一般讀者としては、數多くの未知の作品の中から粗選をしたり豫備知識を與へてもらつたりする要求が生じたわけである。これはスポーツ放送に否應なしに解説がつくやうになると、解説なしにはスポーツが鑑賞出来なくなつた現代人の複合した心理と一般である。文庫や全集に必ず解説がつくやうになつたのが戦後の風習だといふこ

とすら、我々は忘れかけてゐる。かうなると私は豫言するが、今にその號の創作月評を同時にのせた文藝雜誌が必ず出て來るに違ひない。

それはさておき、今月の若手の作品を讀んでいつて、偶然だが次のやうな對照に出あつた。「新潮」に大江健三郎・開高健・坂上弘の三氏の學生作家——現在の學籍を問はないでいへば——が並んで、實によく似た憂鬱な青春を描いてをり「文學界」の新人賞では佳作三篇としてまだ無名といへる三氏の、それぞれ個性的な題材をそれなりに忠實に扱つた作品が載つてゐる。まづ前者についていへば、大江氏の「孤獨な青年の休暇」は一歩長く、妊娠した女に中絶させるために月給を前借りした青年が、浮浪者と飲んで翌日の新聞に殺されたやうに書かれたため、その金で地方都市に逐電し「透明人間」と化する。折からの地方選舉で保守派の運動員がこのことを知つて革新派の候補を殺すのに使はうとするが、青年は己が「自由」のために自殺するのである。その間、スラム街での彷徨、喫茶店の女給との性交、右翼行動隊の中での疎外等無意志の連續で「死者は現實の外にあつてすべてこれを許容し、彼はいつまでも若く、いつも他人だ」といふのである。

開高氏の「お化けたち」、坂上氏の「青い砂」は、こんな「透明人間」的な設定はないのだが、共に目標のない學生生活の中で、アルバイトをしたり、友人の女をとつたりする話で、共通の無目的な雰圍氣の中にある（と私なんかには見える）。所でこれが現代社會で課せられた青年の生活感情だと説明されれば、私はある點納得するが、然しこれが彼等のすべてだと思

はないのである。偶然この三篇を續けて讀まされて、私はいやあな感じがしたのだが、それは私の趣味や年配やモラルの問題ではない。結論的にいへば、こんな青年はゐないのである。私は四十年前の學生時代を思ひ出すが、その頃は自然主義末期で、下宿の古聲の憂鬱や洲崎あたりの女郎が文學的日常生活を形作つてゐた。そしてそれが學生氣質をも支配し、かういふ空氣になつまねば文學はやれないといふ心構へすらあつた。然し、私がうち見た所、かういふ行為は學生仲間にあつたけど、彼等がさういふ人間だといふことは出来なかつた。これと同じ事情が現代のこの種の青年にもあるのではないだらうか？ 彼等の理想型がこの「透明人間」だとは、あり得ないし、また望ましくないことである。

その對照として、私は「文學界」の三篇に好意が持てたのである。これらは選外佳作であり、選者のいふ不滿には私もほぼ同感だ。「ちつぽけなインディアン」(杉啓之氏)はそのヒューマニズムが感傷的過ぎるし、「窓になる少年」(長谷川敬氏)は性にめざめる少年が餘り型通りだし、「O市長の縮小について」(早川隆氏)は諷刺のきかない寓話である。然し各々の主題に對して精一杯で、その限りにおいてその善意が報ひられてゐるのである。或ひはこの三氏を無名といつたのは私の視野が狭いからで、既にスカウトされた顔觸れであらうか？

「群像」の中篇「離脱」(島尾敏雄氏)、「風景の中の關係」(吉行淳之介氏)の二作は、前者は離れかかつた夫の心にしがみつく妻の執心、後者は妻ある男を獨占しないとすまぬ女の執念と

いふ、やや古風な三角關係を男の立場から描き、共に男の未練がましい心情をたどることによつて女の姿の輪郭まで髣髴とさせてゐる。これに對し、同じ雜誌のきだ・みのる氏の「病める心」は、友人になびきかかつた妻を手離しにしておいたら、やがてその危機が過ぎ去ると共に夫の愛も消え失せるといふ、フランスのモリスの小咄にありさうなテーマをうまくはめ込んだ中篇で、ここいらが今月中の堅所の手堅い作品といつた所だらう。この雜誌で一番長い田中澄江氏の「杖」は、私小説風の近況の中に夫の舊家へ疎開中の舅姑との苦しかつた共同生活を思ひ出風に織り交ぜたもので、中に淨瑠璃のさはり、調の文章がよく出て來るので思ひついたが、淨瑠璃ではこの種の義理人情に絡んだ一般的人間關係の苦しみや喜びを觀客に共感を強ひるのが狙ひだが、近代小説の手法は人々の生活の個性を描き分けようとするものである。そしてこの小説にはこの兩要素が無意識に混淆してゐる所に無理があるのを感じた。

短篇で小味な藝を見せてゐる點で、田村泰次郎氏「蟲」(群像)と富田常雄氏「ひよつとこ」(文藝春秋)がよく似てゐる。前者は高校教師が女生徒と驅け落ちて街娼をやらせ、後者はやくざをひもに持つ女給が老人をいろに持つて嫉妬から殺されるといふ筋であるが、女の思ひがけぬ純情さや、男役のそれぞれの鮮かきの點で、この素質の違ふこの二作家が今や同じやうな圓熟を示すのも年功のせむかと思はれた。一寸歌舞伎の名優がその柄にはまつた新作的一幕物で當てた舞臺に似た、すつきりしたものがある。尤もそれだけの閉ざされた世界での完成であり、人物も作者もここからどう發展してゆくかを約束するも

のは何もないのだが。

終りに一言。佐藤春夫・中村光夫兩氏の「荷風論争」は、一應當事者も第三者の批判も終つた形だが、この論争は雙方の氣質に左右されて、廣津・中村の「異邦人論争」ほど發展せず、議論が不發に終つたのが残念である。これは兩者の世代の斷絶から意見の食ひ違ひがあるやうに見えて、實は佐藤氏は近代西洋文學をその生活感情の上で身につけて登場した最初の人であり、中村氏もこの傳統に忠實なることによつて日本近代文學のゆがみと對決しようとする理想家である所から生れた正統派争ひなのである。論争に取上げられたデータはみな枝葉の問題で、そこに兩者の感情がもつたのがまづかつた。

それにしても論争といへば、當人も見物も相手をもへこませて黙らせてしまへば勝だと思ふわが風潮が、これを不毛に終らせるのである。これではプロレスのやうな巧なショーを演ずる者が論争の名人になるおそれがある。私は論争とは、相手とのやりとりに関はりなく、自分の所信を本格的に述べるのが勝だと思ふのだが、わが議會の野黨の質問と同じく、それでは一般には通用しないらしい。

五月

先々月「バルタイ」で一躍評判になつた女子學生作家倉橋由美子氏が、今月は忽ち二つの第二作を書かされてゐる。「非人」

(文學界)と「貝のなか」(新潮)である。確かに「バルタイ」は進歩學生と自由意志を扱つた、異色ある新人小説であつた。當時私はある新聞月評でその成功を認め、しかもこれはこの圖式で一つの完結を示すものだから、もはや同工異曲は許されず、この後に續くものはどうなるのだらうかと、むしろ自重を望む氣持でゐた。然しそれは、スカウトの激しいジャーナリズムでは當然許されないことだつた。

今度の二作は、共に今日の學生生活を扱つたものだが、果して「バルタイ」で既に知られてゐた限りの才能から一步も出てゐない。否、その部分品である。共に多少とも戲畫化されてゐるが(「非人」ではカフカ張りに學生達にしつぽが生えてゐる)それはユーモアといふには餘りたわいのない洒落であり、その蔭にあるのは、ただの寮生活のスケッチに過ぎない。或ひは逆にこれらが「バルタイ」の前身であるといはれても納得出来るやうな作品である。

簡単に紹介すれば「非人」では「ぼく」が寮費の「集金人」の係であるが、Qといふずぼらで不潔な同室の學生に惱まされ、これを除名するか否かを議する學生大會が、ある黨の執行委員會のパロディみたいに描かれてゐる。「雜役夫」が委員長格だといふ皮肉もある。「集金人」とは正確には「會計委員補」でなくてはならないのだが、「ぼく」がさう自稱するのは、寮即ち黨の課する實情からであるが、然しそのため委員としての責任がない所に、彼の「自由」があるわけである。——かう説明して來れば「バルタイ」の讀者にはこれがそれと同じ圖式であることがおわかりであらう。

作者が「自由」になればなる程、登場人物等は自由が奪はれる。このジレンマがいつも倉橋氏の前に立ちふさがり、しかもこれと闘ふよりも、これによりかかつて書いてゐる所が、氏の稚さである。

「婦人公論」五月號に倉橋氏は「學生よ、驕るなかれ」といふ一文を書いてゐる。題名は誤解されさうで筆者に氣の毒だが、とにかくこれは氏の自作解説として無二のものである。當代學生氣質に對して、觀察は急所を抑へ、それを一應整つた社會理論で説明し、敘述にユーモアもこと缺かない。ただ眼につくのは、文中やたらに「生活」「自由」「猶豫」「社會主義革命」といふ風に、抽象名詞がカッコで出て來ることである。このやうにカッコでものを見る所に、氏の才氣の煥發と、考へ方の圖式化がある。だからこの文章は「わたしたち」といふ主格で一貫してゐるのに、それが「あなた方」と讀めて來るのである。こんな風に同輩達を鳥瞰視する意識に、氏の才能の特色がある。

その所を江藤淳氏が「新潮」五月號で、この作家は終始コンバクトを見るのが好きで、その鏡には「明晰」といふ字がはつてある、といふ名警句で衝いてゐる。この「明晰」は私の今の場合「自由」で置き換へてもいいのである。とにかくこの一文に現はれた明晰自由な態度は、確かに秀才型の才女だと呼ぶことが出來よう。勿論さう見立てられることは、御當人本意だらうが、今日ジャーナリズムは本人の意志など構つてゐないのである。

所で今月は更に新しい女子學生作家が現はれた。「群像」の新人文學賞「魔笛」(古賀珠子氏)である。これは女子學生で

戀人と共に黨活動に従事し、妊娠したためにそれから落伍するけれど、結局メーデー事件に参加して倒れ「これで私の青春は終らうとしてゐる」で終つてゐる。この結末の意味が何であらうとも、それまでは古風なプロレタリア小説のやうに、青春の夢を託した黨活動のために敢闘する小説である。選者の一人が『バルタイ』が出たために損したね」といつてゐるが、私は必ずしもさうは思はない。勿論昔のプロレタリア小説と違ふ所は、如何に登場人物が純眞素朴にその理想に向つて邁進しようとも、現代小説では何等かの戲畫化が行はれ、それが作者の自嘲となつて返つて來るところが特徴である。それがこの作品の結末の意味であり、さういつた點で確かに「バルタイ」の手際よさに及ばないけれど、元來この作品の狙ひは戲畫化や自嘲ではない。それはこの女子學生の選んだ道の宿命的な暗いジレンマにあり、この中の例へば査問委員會の場面など(これも一選者のいふ如く)オモチャみたいなものだらうとも、それなりにひたむきな人物を鮮かに描かうとした點、好感のもてる作品である。つまり全體として、この血みどろな題材に「魔笛」といふ牧歌的な題がついてゐるやうな未熟さが、選者達に首をかしげさせる所以であらう。

それにしても何故かう新人がスカウトされねばならないかは、きつかけある毎に述べてゐるつもりだが、要するに一寸名が出た作家は、自衛上敷を作つてその中にこもつたやうな作品ばかり書き出すからである。所で今月の新人といへば、上述の二つの女子學生作家のものを除くと「文學界」に三、四集つてゐる。偶然あてがはれたこれらから、一々取上げることは遠慮

するが、これを読んで私は、青春の虚脱を描くにも躍動を描くにも、作者が素晴らしい氣になつて自己陶醉に陥つてゐることが多いのを發見した。さういへば、大江健三郎氏にしろ、石原慎太郎氏にしろ、坂上弘氏にしろ、さう見えてやはり抑へる所は抑へて書いてゐる。例へば同誌の「夏休みの配當」(岡田睦氏)にしても、男女學生の行動も空想も奔放な快適な題材だが、作者が自分で乗り出して面白がつてゐるので興醒めだ。これは小説家としてのタブーである。

「群像」四月號で丹羽文雄氏が平野謙氏に作品評價の問題について開き直つてゐた一文は、色々反響をまき起したが、それを読んで私は、世には批評家を必要としない小説がある、そして丹羽氏の小説などはその典型だ、などいふことも考へ浮かんだったのであつた。これはまた多くの新聞や中間誌の小説がさうで、だからそれらは文藝時評の對象にならず、またそのことはその作品の價值の高下とは關係ないのであるが、この傾向が次第に文藝誌の小説にまで及んで來たことは、文學の讀者層が擴がると共に當然な現象といはねばならない。今月の創作欄を眺めると、曾野綾子氏の「ハイネモア號の乗組員」などはそのいい例である。

外國歸りの主人公、その友人、極東生活になれた米人、B Gの娘、その友達のグラマーと、程よく洋風の身についたインテリ男女をあしらひ、機知に満ちた風格描寫で彼等を活かせ、面白く讀ませる中篇である。この作品のうまさは、かういふ洋式のマナーや常識について體よく讀者の知識を試す所にある。讀者はそれを知つてゐたら得意になるし、知らなくても恥をかか

せないで教へてもらへる。そのかね合ひを作者は實によく心得てゐる。クレゾールを飲んで自殺すると、胃洗淨がきかないので効果的ださうだし、ブラジャーをイギリス風のつもりでブレイヤールと發音したら火鉢と間違へられたなどといふたぐひだ。最後に、猥雑な喫茶店で働くグラマーがカトリックの修道會に屬してゐたといふ下げも、批評家が何か文句をつけるより先に、この小説にとつて手ごろな額縁の役をしてゐるといふ、手に入つた仕上げ振りである。

「文藝春秋」は、雑誌の性格上、昨今「批評のいらぬ小説」ばかり載せてゐるが、今月は安岡章太郎氏がそこに登場して見事な成功をしてゐる。分類すれば氏は戦後派型の私小説作家だが、この「質屋の女房」といふ短篇は、そのいつもの薄汚い(これは失禮!)特異な破滅型の青年を主人公にし、暗い質屋の店先を背景に、これも餘りパツとしない女の心盡しを描いて餘韻を持たせてゐることは、氏として間違ひのない進境を示すものである。氏のなじみの讀者は、あああのいつもの男が登場したな、とすぐ思ふ。然しふりの讀者にもこの男の執念みたいなものが通じる所が傑作だと私はいふのである。

石原慎太郎氏の二百枚の處女戯曲「狼生きろ豚は死ぬ」(中央公論)は、坂本龍馬を中心に、維新の志士の暗躍といふ手の混んだ人事交渉を描き、そこに氏のいつもの人生觀を盛つてゐるのだが、明快で筋道がはつきりしてゐて、例へばスポーツの模範試合でも見るやうにテキパキ運んでゐる。この手際よさにあきたらず、幕末の志士なんて心境も驅け引きもつと複雑なのだぞと絡んでも始らないのであつて、舞臺にかければ新國劇

の観衆が一と眼で經緯を飲み込むやうに理解されるであらうからには、もう作者の勝である。

主人公は志士達ではなくて、久の宮清二郎といふ殺し屋である。龍馬の護衛に雇はれて最後に彼だけでなく二三の重要人物を殺すのであるが、このニヒルの劍客は風貌の上で机龍之助・丹下左膳以來の傳統を帯びてゐる。同じ「中央公論」で佐伯彰一・村松剛・篠田一士の三氏が時々現代文學のシンボジウムを連載してゐるが、今月の分で石原氏に觸れ、それが何か型破りに新しいものではなく「わが國古來の原始的な生命力信仰」の現代版だといつてゐるのが、丁度この作品にも當てはまるといへよう。尤も作者自身はそれでは不服で、ここに現代青年の政治に對する懷疑があるのだといふかも知れない。然し、この形の上の暴力の勝利から、ある讀者がこの作品を「狼は殺され、豚は生き長らへる」と讀んでも、文句はいへないのである。

次は川崎長太郎氏の百枚の中篇「徳田秋聲の周圍」(群像)である。漫畫家が必ずしも似顔繪描きでなくてはならない筈はないのに、わが國では殆ど例外なくさうであるが、私小説作家がある實在の有名人のスケッチに長じてゐることも事實である。これは秋聲と山田順子との情事を中心にして描いた作品だが、そこに作者自身端役として登場し、彼等の經緯の本筋には介入しないが、自分の生活の一つの場として彼等の情事を眺める。その結果彼らの情事は、實は作者を主人公とする私生活の一部なのである。かういふ倒錯した身勝手な私小説家にはあつて、その小説技術の圓熟と共に、副人物としての秋聲・順子の描寫に鮮やかさが増すといつた手順を踏むのである。

この場合副人物はとかく主人公の存在の都合で支配される。作者は故意にゆがめようとするのではないが、古い言葉でいへば、彼の「主觀の燃焼」がある程度人物をでつち上げる。この作品にもそれがあるし、先頃中村光夫氏が佐藤春夫氏の「小説永井荷風」を衝いたのも、論法は違ふがこの點であつた。だから、誰かかつて身近だつたある人から、この男女像の眞實性について文句が出ることはあり得る。然しその場合も、そのため私小説家川崎長太郎の作家的眞價に變りはないのである。

最後に取り上げる北杜夫氏の「夜と霧の隅で」(新潮)は、二百二十枚もあり、内容的にも今月の最も重量感のある作品である。これはナチの大量虐殺を背景に、敗退期における南獨の精神病院で、當局から不治患者の安樂致死を強要された時の、醫者達の反應を中心主題にし、作家といふよりはあくのない事件報道記者的な才筆で、まざまざと描いたものである。ヒットラーの「優生法」を支持する醫者もゐる。この機會に徹底的な治療法を試みて患者を「實驗」する學者的な醫者、ドイツ的義務感の權化である院長、ヒューマニストの女醫等、諸人物の立場が圖解のやうにはつきり描かれてゐる。そして、人命に對して現代醫術が矛盾した面がある點も説明されてゐるので、單なる政治小説としての傾向性から脱してゐる。結局、善意と良識の側から、世紀の殘虐とまともに取り組んだ力作である。